

# 八戸市の都市化について

石橋恒則

## 1. はじめに

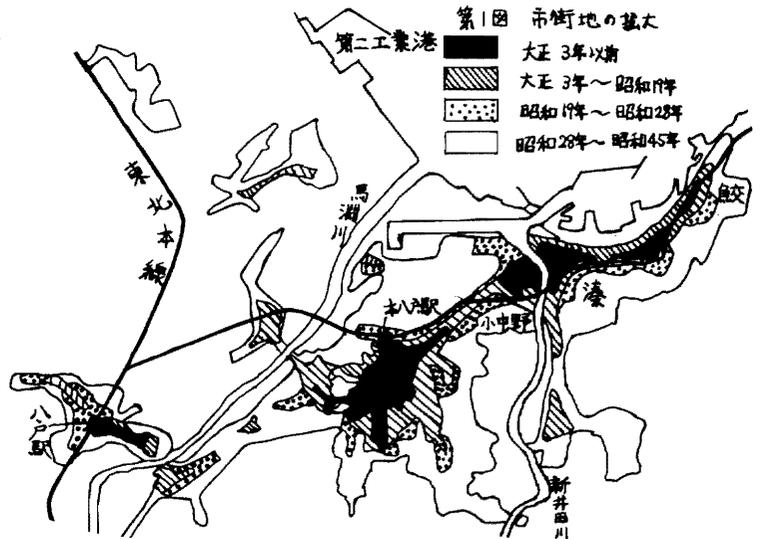
八戸は江戸初期に城下町として形成され、以後漁業、商業を中心に発達してきた。そして昭和期に入ると港湾整備や河川改修工事等に伴って多くの工場が集積するようになり、昭和30年代以降は工業を中心として発展しているといえる。この論文では、以上のようなことを背景にして八戸市の都市化がどのようになされたかということ考察してみた。

## 2. 市街地の拡大

現在の八戸市街地の基礎は江戸時代の城下町としてであり、以後青森県南から岩手県北に及ぶ地方経済の中心として発達してきた。この発展をうながしたのは鮫港の海運である。明治期に入ると金融業の整備が進み、商業機能も活発であった。しかしそれと同時に明治期は相対的に地位が低下した時期でもある。つまり明治24年東北本線の開通や27年湊線の開通により物資流通面において八戸港の機能が一時後退することになる。しかし大正期に入ると漁業が著しく進展し、本格的工場第一号として日の出セメントが進出した。この時期に港湾工業都市としての基礎が固められたと思われる。次に、大正3年以後の地形図を用いて市街地の拡大についてみてみたい。第1図はその形成過程をみたものである。大正時代には鮫から白銀・湊・小中野・八戸を経て尻内に至るまでだいたい東西方向に各集落が分布している。昭和19年

までは八戸と小中野の連結がみられる。これは大正14年に日の出セメントが新井田川右岸に立地し社宅や市営住宅が建設されたことにより促進させられた。また昭和5年八戸線が久慈まで開通し昭和7年には鮫漁港の修築が完成した。このことにより湊・白銀・鮫の台地下の道路沿いにおいて市街化がなされている。しかし、上水道施設、道路整備等の

遅れから台地上への拡大はまだみられない。昭和19年から28年においては、尻内―八戸―湊―鮫を結ぶ東西の線を軸に道路沿いに市街地が発達している。また、湊・白銀・鮫地区では昭和25年三島下の湧水の揚水によって住宅が段丘面上に進出し水産加工場も建設されるようになって市街地が南



部にのびはじめている。昭和28年から45年についてみると既成市街地を取り囲むかたちで市街化が大きくなされておりまた大館・白銀・鮫地区での南部台地上への拡大が大きい。また根城付近での拡大も大きく、尻内と八戸の市街地が連結している。昭和30年代から40年代にかけては、第一工業港の完成東北電力八戸火力の建設等により八戸低地全域に工業機能が集積し工業化が進展した時期であり、それに伴って本八戸駅裏一帯に中・小工場や住宅が立地し市街化がなされている。以上みてきたように八戸は最初東西方向を軸に線状に市街地が拡大してきたが戦後は工業化に伴って南北方向に面的に拡大しつつあるといえる。

### 3. 人口動態

八戸市の人口は昭和4年の市制施行当時わずか51000人であったが、昭和25年には100000人、41年には200000人を突破して51年8月現在229000人に達している。特に昭和29年以降から急激な増加がみられる。29年から33年までは周辺町村の合併による急増であるが、それ以後も人口急増傾向がみられ33年から42年までの10年間に約40000人の増加がみられる。社会動態では32年から42年まで年平均2100人の社会増がみられる。43年以降、社会動態はマイナス傾向にあり、飛躍の人口増加傾向も頭打ちのきざしがみられる。

### 4. 工業化について

前述のように最初の工場進出は大正時代の日の出セメントの進出で新井田川右岸に立地した。昭和12年には馬淵川旧河口右岸に日東化学、さらに日本砂鉄等の砂鉄工場が立地し小中野、沼館地区の工業化が進んだ。このような工場の集積は馬淵川改修工事や流域変更工事等により、整備が進んだことによるものである。昭和20年代に入ると水産業の発展に伴い水産関連工場が白銀・湊・小中野地区に多く集積している。30年代に入ると第一工業港完成に伴い八戸低地帯に多くの工場が立地した。31年八戸ガス、32年太平洋金属、33年東北火力、石油分配基地などである。さらに35年には東北砂鉄、東新鋼業等が馬淵川左岸の北沼・八太郎地区に立地し、40年代に入り第二工業港建設に伴って三菱製紙、八戸製錬等が進出し、第二工業地帯として発展している。また近年この地域に鉄工団地がつくられ、さらに市川地区には水産加工団地がつくられ、工業機能の再編成がなされている。

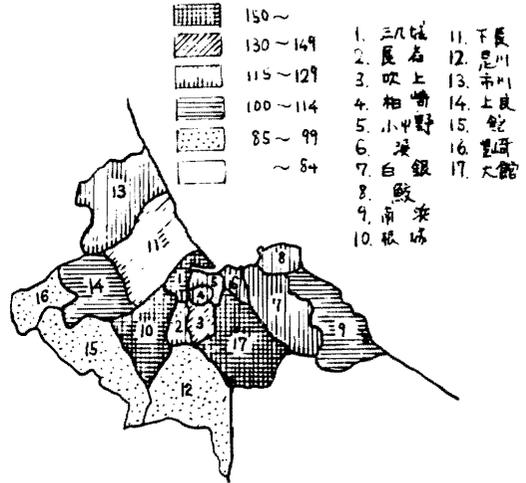
### 5. 住宅地の拡大

第2図及び第3図は昭和33年から42年まで、42年から51年までのそれぞれ9年間における人口増減の指数を旧町村単位の地区別にあわしたものである。この地区別人口増減を指標として住宅地の拡大を考察してみた。

#### (1) 昭和33年から42年まで

第2図によると、三八城、根城、大館地区で指数160以上で著しく増加している。逆に減少のみられるのは是川、館、豊橋地区の農村地帯である。三八城地区は指数166、実数で79000人の増加である。この地区には三日町、十三日町などの中心街があるわけだが、これらの中心街では30年代中ごろから停滞ないし減少傾向にあり、おもに増加しているのは、中心部周辺および城下、沼館の本八戸駅裏一帯である。根城地区は指数160実数で50000人の増加である。この地区は八戸駅と八戸中心部の中間にあり、それを結ぶ道路沿い、段丘上に宅地化が進んだ。28年、職業訓練校33年、東北電力のアパートの建設、34年からは土地区画整理事業の実施、そして37年、司法センターの移転立地、38年には田面木に国立高専が設置された。以上のような公共施設、学校の進出が原動力となって宅地化が進んだ。大館地区は指数163、実数で40000人の増加である。この地区は33年八戸市に合併された直後は減少傾向であったが、昭和38年八戸市として初めての大規模な住宅団地が造成されたことにより宅地化が進んだ。

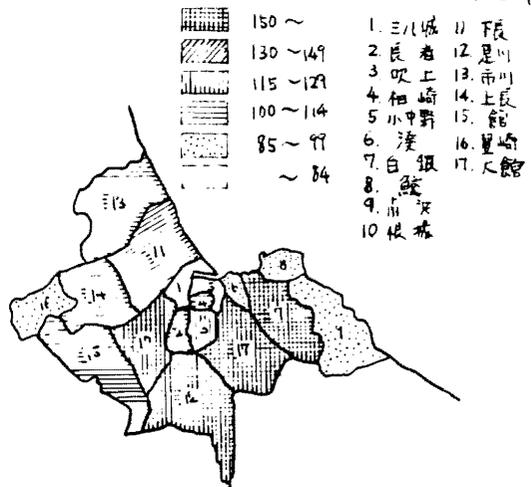
第2図 八戸市の地区別人口増減(指数) 昭和33年～42年



(2) 昭和42年から51年まで

第3図によると人口急増地区は根城、是川、大館、白銀の南部の地域である。減少地区は三八城、小中野、湊、鮫、豊崎、南浜の6地区であり、中心部におけるドーナツ化現象がみられる。根城地区は指数160、実数で80000人の増加であり昭和30年代の公共施設、学園進出、さらには39年から49年にかけての区画整理事業また近年における3・4・8街路の建設などにより段丘上を中心に宅地化が進んでいる。是川地区は指数255、実数で50000人の増加である。昭和46年から51年にかけて是川住宅団地が建設されたことによる。このことによりバス路線が発達し、49年には商業高校が移転立地し、今後も宅地化が進むと思われる。大館地区は指数167、実数で67000人の増加で39年から42年の旭ヶ丘団地が先がけとなり県営住宅や民間の団地の進出などが著しく宅地化が盛んである。白銀地区は指数166、実数では96000人と著しく増加している。43年から46

第3図 八戸市の地区別人口増減(指数) 昭和42年～51年



年にかけての白銀平住宅団地の建設、さらに桜ヶ丘団地と台地上での宅地化が著しい。また51年には白銀から鮫にかけて大規模な住宅団地の建設が計画されている。次に人口減少地区である三八城地区は指数77、実数で4500人の減少である。中心市街地の拡大に伴うドーナツ化現象であるが、本八戸駅裏地区では、まだ宅地化がみられる。小中野地区は指数79、実数で5800人の減少である。この地区は、住・商・工混在地区であり公害がかなり強く影響していると思われる。

## 7. 結 び

以上みてきたように八戸市においては最初東西方向を軸に線状に市街地が拡大し、戦後は上水道施設の整備等により台地上への拡大が進み、南北方向に面的に市街地が拡大してきたといえる。そして尻内ー八戸ー湊・鮫を結ぶ線を境に北部では八戸低地帯、北沼・八太郎地区を中心に工業化が、南部では根城・大館・白銀地区等の台地上を中心に住宅地化が卓越している。また近年八戸市においては鉄工団地、水産加工団地の建設、そして卸売団地、住宅団地の建設等住宅、生産、流通等の機能が再編成されている。現在、八戸市における都市化は、このような諸機能の再編成期の段階にあると思われる。

最後に本論文作成にあたり、御助言、御指導をいただいた横山先生、水野先生に深く感謝いたします。

### 参考文献・資料

- 1) 山鹿 誠次(1960):「大都市近郊の都市化ー東京西郊を例としてー」  
地学雑誌 719号
- 2) 横山 弘(1965):「八戸の農地潰廃」  
東北地理 17-1
- 3) 松崎 徹(1965):「八戸工業地域の地域構造上の問題点」  
東北地理 17-3
- 4) 高橋 正雄(1968):「新産都市八戸市の工業ーその立地論的考察ー」  
高橋正雄論文集
- 5) 奥平 忠志(1973):「室蘭市の市街地の拡大」  
東北地理 25-4
- 6) 八戸市統計書 昭和51年
- 7) 「八戸港史」(都市編)P113~127 1976年
- 8) 「八戸地域商業近代化地域計画報告書」(1976年) 商業近代化八戸部会編集